

こんな時代があった、13歳の夏

こみなみ さくろう
堺市 小南 朔郎 89歳

昭和20年3月、集団疎開先の福井県小浜市郊外の禅寺から、卒業のため大阪市城東区中浜小学校へ、6年生だけの卒業式だった。

4月～5月、私は大阪市天王寺区にある官立大阪第一師範学校附属小学校高等科（現在の国立大阪教育大学付属中学校）に入学したが、空襲が激しくなり、授業中に校内の防空壕に入ることがたびたびあった。

6月15日授業中、空襲警報が鳴り、アメリカ空軍のB29爆撃機数百機が3千トン以上の焼夷弾を大阪市内に投下しはじめたので、授業は中止、ただちに下校し、通学駅の寺田町駅の改札口に避難。改札口の真上の線路、学校および駅周辺に焼夷弾が落下し、学校に残った上級生は、母校を焼くなど消火活動中に、焼夷弾がさく裂して死亡、後日学校葬があった。その日、路線は不通、寺田町駅から森ノ宮駅の4駅の距離を徒歩で家にたどり着いた。

戦況が激しくなり、学徒動員令により最年少の動員生として、旋盤を使っ

て航空機の部品を作るため、和泉市内の軍需工場へ行くことになった。2 駅離れた北信太駅近くにある学校の寮から工場へ徒歩で通い、7 月～8 月の夏休みもなく、連日作業に追われ、勉強どころではない毎日だった。

8 月 13 日、家から電報があった。17 歳の兄に赤紙が届き、「14 日大阪第 8 連隊へ出征すぐ帰れ」とのこと、帰阪した。

翌 14 日に兄を見送り、ただちに軍需工場へと家を出るとき、空襲警報が鳴り、今回はわが家近くにある大阪市城東区森ノ宮の大阪陸軍造兵廠兵器製造工場への空襲だった。女、子どもは逃げろ、工場から離れよ、と指示があり、母と逃げる途中、1 トン爆弾数百発を積んだ B 2 9 爆撃機約 50 機が頭上近くに迫り、城東区城山公設市場付近の防空壕に逃げ込むと同時に、近くで 1 トン爆弾がさく裂した。轟音と地響きで、壕内で全身がもんどりうち、爆風で眼球が飛び出し、轟音で鼓膜が破壊されるのを防ぐために、眼と耳を押さえることで必死であった。波状攻撃してくる間に壕から這い出すと、周囲は砂塵で薄暗く、その中で木製電柱が粉々になっていた。遠く近くで爆弾が落下し、次は真上か、もうだめかと死の恐怖を感じた。

数時間後、警報が解除され、爆風で大屋根に飛ばされている人を見ながら家路に着くと、自宅横には 1 トン爆弾がさく裂、すり鉢状の深い大きな穴が空き、家は吹っ飛んで柱 5、6 本の状態になっていた。攻撃目標の

軍需工場はすさまじく破壊され、多数の人が死傷された。これは終戦の15日の十数時間ほど前のことであった。母と私はその晩、破壊を免れた無人の家で夜を明かした。終戦とは知らず、北信太の学校の寮へと向かうとき、森ノ宮駅は線路が破壊されていたので次の玉造駅まで歩き、やっと寮にたどり着いた後に、終戦を知った。

数日後、寮から級友数人で数キロを走り、大阪湾の助松近くの海岸へ。これからは焼夷弾で焼死か、爆弾で爆死しないで生きられると、何か訳のわからない歓声をあげながら海岸を走り回ったことを、あれから平和な77年、私の90歳の脳裏に夏が来ると、鮮明に思い出します。